

2020年度教育研究活動報告用紙(様式9)

氏名 溝部 昌子	職名 教授	学位 博士(保健学) 東京大学 2003年
----------	-------	-----------------------

研究分野	研究内容のキーワード
看護技術 高齢者看護 循環器疾患の看護 国際看護	看護技術、循環器看護、血管看護、老年看護学 異文化対応能力

研究課題
<ul style="list-style-type: none"> ・看護師が行う下肢血流障害の評価、深部静脈血栓症予防対策 ・看護基礎教育における血管看護技術教育 ・血管看護教育における教材開発 ・異なる文化的背景をもつ患者への看護ケア ・外国につながる人々への看護におけるコミュニケーション

担当授業科目
<ul style="list-style-type: none"> ・老年看護学概論(前期) ・老年看護学演習(前期) ・看護研究(前期) ・看護総合看護学演習(前期) ・看護総合看護学実習(通年) ・老年看護学実習Ⅰ(通年) ・老年看護学方法論(後期) ・国際保健論(後期)

授業を行う上で工夫した事項(※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【老年看護学概論】</p> <p>①老年看護では、いわゆる高齢者介護だけではなく、様々な新しい技術や学問体系を用い、価値観や社会の変化の中で豊かに生きることを支えるという特徴を理解していただく必要があります、そのために教科書だけでなく様々な書籍、調査、テレビ番組、記事、論文、資料、実体験を用いてその実例を紹介した。前半は老年看護の基礎知識として、記憶すべき理論や制度、統計情報が多く、後半は価値や信念、サクセスフルエイジング、看護理論など抽象的内容が主であった。前半はかつこ抜きプリントやフォームを使ったクイズ、繰り返し説明するなどして知識の定着を図り、後半は様々な社会の事例を紹介し、老年看護学を身近なものとして解釈できるよう工夫した。</p> <p>②授業ごとに実施したフォームへの回答から、「わかりやすい」や、将来看護師になった時に〇〇したいと思ったという回答が多く得られた。通常は教科書と紙の配布資料で講義を進めていたが、遠隔授業に際して、写真を多く取り入れたパワーポイント教材を新たに作成し利用した。これに対して毎回のフォームでの振り返りで、興味を持って100分の授業を集中して受講できたことにつながったという回答を多く確認できた。</p> <p>③7回の講義で提出されたフォーム回答、3回の提出課題、前期試験の合計で最終評価とした。平均点85.1、中央値85.8 最低62、最高94点 尖度26.9、歪度-1.3で、80点以下が5人おり左に裾野を持ちながらも正規性の高い分布となった。</p> <p>④講義で話すスピードがゆっくりでちょうどよいと、フォームに書いた学生が毎回複数おり、どちらかと言えば早口で分量が多すぎるのではないかと考えてきたので、学生の反応を見ながら進めていくことが大切だと感じた。</p>

これまで、客観的事実や情報のみで授業は構成すべきであると考えてきたが、学生が親しみや興味を持てるように、自身の考えや体験、身近なテーマを話したことに對する学生の反応を毎回多く確認できたので、今後も参考に取り入れていきたいと考える。少人数でのグループディスカッションはできなかったが、学生フォーム回答を集計、編集して学生と共有し、他者の意見を知ることにつなげることができ、教室でのディスカッションに比べ、手間はかかるが有効であったと思う。

授業科目名【看護総合看護学演習・実習】

- ①緊急事態宣言により、通学ができないまま新年度が始まったため、4月当初より GoogleMeet を用いてゼミを開催してきた。はじめは、国家試験対策として過去問集の回答と解説や、講義を行い、学習の習慣づけを図り、就職活動への対応を個別に行った。遠隔でのやり取りで進められることがわかり、5月遠隔授業が開始となつてからは、総合演習・実習の課題を設定し取り組みを開始した。
- ②深部静脈血栓症予防と看護に関して分担して学修し、最終的に 55 ページの冊子を作成した。参考文献を学内で調達し PDF 化し、GoogleClassroom に保管。学生は該当の文献を選択し精読、要約を作成し GoogleClassroom で共有、プレゼンテーション。最終的に提出された物について、内容、出自、表現を溝部が編集し、冊子にした。総合実習としては、この深部静脈血栓症の観察と予防ケアに関連して、富士フィルムメディカルの協力を得て、ハンディエコーで深部静脈の観察をした他、下腿計測、ABI 測定、弾性ストッキング着用とその指導、間歇的空気圧迫装置、足関節運動の一連の看護技術演習を実習室で行った。演習で獲得した知識をもとに、技術演習の方法は、各自が自律して取り組めており、学んだ充実感があったという記録があった。プロセス、成果においても、看護基礎教育課程 4 年生として優れた内容となったことから、学ぶ障壁や手間を軽減することは、高学年では有意義であると感じる。また、学修について信頼できる学生であったとも言える。
- ③コロナ禍において、特に 4 年生では、学ぶ方法とその支援方法が従来とは全く異なるものになったと感じるが、学生は、遠隔のメリットを生かして GoogleMeet での友人同士のつながりや勉強を継続できたものとする。一方では、家庭環境によっては、必ずしも有利ではなかった学生もいたであろうと思うし、学生が大学施設を利用できる権利や自由がもう少し柔軟に確保されたらよかつたのではないかと思う。また、総合実習に対する学科の方針が検討されていたが、結論がないまま進行していった点は、次年度は事前にいろいろ申し合わせて戦略的に計画していく必要があると感じる。

授業科目名【看護研究の基礎】

- ①研究結果が人の生活や看護の提供にどのように役に立ち、必要なものであるかについて様々な実例を用いて解説し、受講のモチベーションを上げるための教材作成に前半は注力した。特に COVID-19 に関する情報収集や情報利用について研究の基礎知識と共に説明できたことは、興味をひくことができたとする。学生がグループで取り組む課題の設定や、研究計画書の作成、フォーム作成、データ集計、論文化、プレゼンテーションについて、担当教員から適宜講義を受けながら進めていく科目構成は効果的で効率的であったとする。
- ②学生が設定した課題のテーマは、遠隔授業に関すること、大学生の飲酒、健康・睡眠習慣、受動喫煙に関するものなどで、看護学生としての知識と関心を反映したアンケート調査を実施し、結果の解釈、論文化に至った。プレゼンテーションにおいても、制約が多い中、グループメンバーと協力して準備、練習をして臨んでおり、誠実な学修姿勢を確認することができた。
- ③当初グループでの取り組みを予定していたが、感染予防対策の観点から個人課題としてシラバスを変更した。その後遠隔講義となり、結果的にグループワークに変更したが、オンラインでのグループワークは学生同士のディスカッションや、フォームを使ったアンケート、ドライブ上のファイルの共同編集などの機能を使いこなしながら想像以上に活発にできたと感じると同時に、オンラインでつながっていない部分での学生の負担や頑張りを把握することは困難で、学生アンケートなどの意見から知るのみで、グループワークの参加度について不満に思う学生がいたようだった。グループでの課題作業が学生によっては負担になったという意見があったが、グループ内での学修役割を平等に果たすことは困難であり、円滑に学修活動を行える人間関係の構築についての 3 年生の課題があると思われる。

授業科目名【老年看護学演習】

- ①成人老年看護学演習から分離独立して初年度にあたり、老年看護学実習 I の前提科目であり、老年看護学概論、方法論を踏まえ、高齢者アセスメントや看護技術を学修するための順序性や合理性を考慮されたプログラムを提供できたとする。遠隔授業となったために、授業準備に時間的猶予ができたため、本来

今年度取り組む予定ではなかった「老年看護アセスメントガイド」を独自に作成し、学生に提示、活用することができた。その他、様々な教材についても想定以上に充実した内容で用意することができた。看護過程の展開がこれまで以上に時間・内容とも多く計画できることに合わせて、事例を想定できるよう、協力会社に依頼してイラストを描き起こしたり、学生アルバイトに依頼し、高齢者安全に関する KYT 危険予知トレーニング用のイラストを描き起こしてもらうなど、通常の講義資料のほかの教材についても格段と充実した。新規採用した老年看護過程の参考書は、遠隔授業で看護過程を進めるうえで、学生が資料・情報不足にならずによかったと思われる。

- ②看護過程に関する提出 2 回、技術課題に関する提出 7 回、試験の合計で最終評価した。平均 84.0、中央値 86、最高 98、最低 52 点、80 点以下 12 人であった。看護過程、技術課題の完成度は個人差があるが、繰り返し指導する中で、おおむね達成されていたと考える。80 点以下の学生は、課題を提出しないことが主な原因であり、学修の困難さを反映しているわけではなく、逆に繰り返し指導して目標を達成した学生の中にも、今後臨地実習で看護過程を展開するうえで難渋する者も含まれると思われる。
- ③GoogleClassroom 上での看護過程の展開についての指導は、効果的効率的でもあったと思うが、操作に慣れない学生にとっては大きな負担になったと考えられる。金曜日 4 限科目で、フォームや課題の提出、質問とその対応が土曜日に及ぶことも多く、学生教員とも非常に負担の多い科目であったと思う。にもかかわらず、学生・教員とも最後まで熱心に取り組み、学習成果と共に良いプロセスを共有できた実感がある。科目で行ったアンケートや授業評価においても、学ぶことが多かったと記載されていた。
- ④学生が学修するための資料や教材などは毎回十分量提供できていたと考える。むしろ授業時間の中に課題に取り組む時間を設けるなど、教員側から提供するものを減らしてもよかったのではと、学生意見からも感じている。他の科目についても看護過程を展開するため、課題量が多いという意見が多くあった。3 年前期の課題量については一度学科で検討しても良いのではないかと感じる。次年度は、看護過程の展開はパターンを絞り（健康管理、栄養、活動休息、運動、価値信念）取り扱う病態・症例を増やし、課題学習の割合を減らし、講義メインで展開していきたい。

授業科目名【老年看護方法論】

- ①老年看護では、様々なツールを用いて患者の状態を評価し、ガイドラインを用いてケア方法を検討することが多く、どの單元においてもエビデンスに基づいて看護を実践し評価するという原則に沿った授業を展開した。また、栄養や排泄など、どの單元においても、患者の生活歴や意向、環境によって目標や手段、方法が変わってくることも特徴的であり、知識の提供と同時に必ず説明するようにし、課題についても単なる情報整理でなく思考を伴う形式とした。
- ②最終評価は、課題提出 50%、筆記試験 45%、その他 5%で、定期試験のみの点数は、平均 74.8 点、最高 50 点、最低 98 点であった。最終評価は、平均 82.6 点、最低 69 点、最高 99 点であった。課題提出 8 回については、毎回優れた成果がある学生は、筆記試験でも高得点であった。課題は、授業で説明したことを宿題として課題に取り組み、提出後振り返りを授業で聴くという段取りとしていたが、途中授業で説明が十分でないまま課題に取り組む回もあったので、その点は難しかったのではないかと感じている。課題が多いという意見も複数があるが、資料を見て情報を分析しながら検討していくものは、そもそも暗記で実施するものではなく、課題での学修が適切だと考えるし、実際にその活動が筆記試験前に行われていることで合格できているのだと考える。
- ③授業で毎回回答してもらっているアンケートや授業評価においても、幅広い知識が身についたと記載があることから、ある学生にとっては満足度が高いと考えるが、情報が多く複雑な検討課題が多くなると、混乱して習得が難しい学生もいると思われ、ある程度範囲や情報量を絞っても良いのではないかと考える。遠隔授業となったものの、皮膚のケア、食事のケア、排泄自立支援など実感できるような説明や教材提示ができたことは効果的であったと考える。
- ④課題の紙での提出や、対面での筆記試験、自筆での定期試験について、事前に案内していても、何かにつけ COVID-19 や自己都合に絡めた意見があった。学習意欲や対処能力が脆弱な学生と、様々なスキルを身につけ、強さを増した学生との対比を感じた。学生にとっても学習や生活環境に対するストレスは高かったと思われ、今後の成長に期待したい。科目の学修については、コロナ禍においても目標を達成できていると考える。
- ⑤科目の学修については、コロナ禍においても目標を達成できていると考える。今後は、4 年生に看護学特論が開講されるため、老年看護の発展に関する単元を移動し、方法論についてゆとりを持って講義・

課題・解説などのフィードバックが行っていく予定である。

授業科目名【国際保健論】

- ①看護における国際化について、インバウンド、アウトバウンド共に身近な課題となっていることを理解してもらうために、教科書の情報だけでなく、海外旅行や海外研修、留学などの経験談を写真を用いて示したり、映画やドラマの場面を紹介したりするなど教材選択を工夫した。また、調べ学習として海外に目を向けるだけでなく、アイヌ文化に焦点を当て、文化的背景が人の価値観や生活に影響を及ぼしていること、国内においてもすべての人が大切にしている文化があることと看護を関連付けられるように示した。学生は課題や遠隔授業の負担も多かったと考えられるが、授業の課題以外に具体的に取り組んだことを8名の学生が記載しており、興味や関心が高まったと考えられる。
- ②Google Classroom の剽窃チェック機能で、レポートのデータソースがわかり、あつた資料の種類やまとめ方に違いが確認できた。非常に少ない情報からレポート作成、提出をしている学生については低評価とした。共通課題と、グループ別課題の2つが主な評価対象で、グループ別課題は、民話や神話と文化との関係、世界の出産と産後ケア、深部静脈血栓症予防ケアに関する資料の翻訳、世界の病院食について、2~5人グループでパワーポイント資料をまとめプレゼンテーションを行った。すべてのグループは丹念に情報を集め、整理し、プレゼンテーションの準備を行っていたことが遠隔においても伝わってきた。プレゼンテーションの聴取にあつても、関心を持って聴くことができていた。
- ③将来看護師になったときに患者の文化的背景について配慮できるか、あるいは自らが海外で看護師として活動したいと考えるかがこの科目の学生にとっての意味だと考える。これまでの経験や将来の展望が異なる学生が同じ授業の中で看護の国際化について学ぶことは、多様性を理解する上で意義深いと考える。病院マップを使った外国人患者への看護対応については、イラストを用いた教材に親近感ももてるというアンケート結果が多く得られ、関連の研究資料としても初学者に対する教材提示方法の有効性についての示唆を得た。
- ④2つの課題に取り組むことが学生にとって過重であったかどうかわからないが、単元ごとに何を学んだかが最終的に記憶に残らないような課題の出し方は改め、単元ごとのディスカッションテーマを明確に示し、ディスカッションや思考のプロセス、活用した知識を想起できるような展開にしたい。ディスカッションの時間を設けることが少なかった。遠隔授業であっても意見交換ができるような技術的な課題をクリアし、単元ごとの構造化されたディスカッション課題を提示することを検討している。また、ディスカッションの記録として、グラフィックレコーディングは言語的障壁や文化的障壁をへらすことに役立つと考えられ、次年度からスキルの一つとして取り入れたい。

授業科目名【老年看護学実習 I】

- ①新年度当初より、実習施設小倉リハビリテーション病院と臨地実習の方法について検討を重ねてきた。第1波緊急事態宣言下においては、全てが学内実習であり、実習施設との関係性の継続、臨地実習の臨場感を目的として、病院からの遠隔講義、看護場面の動画作成を依頼し、協力を得られた。これにより、臨地実習指導者による説明、患者の実際の看護場面を見学し解説を聴き学ぶことができた。動画作成においては、患者の同意取得に難渋されたとのことで、臨地実習が患者とその家族の十分な理解と協力と学生との相互関係の上に成り立っていると改めて知ることができた。さらに、小倉リハビリテーション病院の本学教育への惜しめない協力体制についても改めて感じ、その信頼関係が老年看護学実習の基盤にあることを理解し、教員、学生共々、感染予防対策方針を遵守したいと考える。なお、このような予算化や臨地実習の方法調整が各領域に任されており、ローカルに調整する部分と全体的な統括機能とが不明瞭で、学科方針との整合性を示すプロセスが必要と感じた。
- ②本科目は進行中のため、最終評価ではないが、平均点は80点前後となる見込みである。全体として、通学や臨地実習施設における教員・患者・実習指導者・グループ学生などの人間関係や緊張、感染症など様々なストレスから解放されたと思われるが、提出物の締め切り、出席などに問題があった学生は、心身や家庭環境の不安定さがあるものと思われた。概ね、設定した課題については、内容的にも達成されていたと考える。看護過程の展開や、テーマに対するディスカッションは遠隔であっても従来のカンファレンスよりも発言機会や内容も充実する傾向があった。事例についての分析についても、文献検討や情報収集が捗り、充実した成果が得られた学生が多かった。
- ③時期により、一部臨地実習5グループ、学内と遠隔（自宅）実習8グループ、完全遠隔（自宅）実習2グループとなった。時期により実習内容や方法が多少異なる点については都度説明し、特に苦情はなく、

学生には十分理解が得られていたと考える。臨地実習で行うものとして、看護技術の見学・実施、患者とのコミュニケーション、学内では看護過程の展開、倫理課題、継続看護の展開、技術演習（移動の援助・口腔衛生・褥瘡評価）と、区別して実習しつつ、従来の実習目標を達成できるよう再構成した。この成果について、8月、the13th International Nursing Research Conferenceにおいて、Webinar 発表した。今後も、日本看護系大学協議会の情報提供を参考にしながら、新しい時代の看護教育における臨地実習の在り方について、発展的に柔軟に検討していきたいと考える。既に、小倉リハビリテーション病院看護部とは、様々な情報共有を行い、学内実習と臨地実習を組み合わせた方法で老年看護学実習を継続していく方向性で検討を進めている。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等（任期）	加入時期
日本血管外科学会	チーム医療推進委員会委員	2014年～現在に至る
日本血管看護研究会	代表世話人 研究会プログラム委員	2015年～現在に至る
日本リンパ浮腫治療学会	評議員	2016年～現在に至る
日本看護科学学会		1999年～現在に至る
日本看護管理学会		2003年～現在に至る
日本看護評価学会	編集委員会委員 2021年1月～編集委員会委員長	2011年～現在に至る
日本循環器看護学会	学術委員会循環器看護ワーキンググループメンバー	2014年～現在に至る
日本看護理工学会		2016年～現在に至る

2020年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<p>【報告書】 10年後の見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書 Vol.4</p>	共著	2021年3月	看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	看護学教育研究共同利用拠点におけるFDマザーマップにおける国際交流における取組のまとめ。留学生への生活支援、学修支援、学生の国際交流推進、MOUに基づく大学間の交流の進め方、具体的な方法と配慮すべき事柄について示した。 A4版 頁数:全20頁 著者: 野地有子、溝部昌子、近藤麻理、小寺さやか、相原綾子、炭谷大輔 担当:p6-9、p19
<p>令和2年度共同研究 看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究 コンテンツ報告書 nGlobe 研修</p>	共著	2021年3月	看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	2020年度日本千葉大学とドイツシャリテ以下大学病院をWeinar で結んで提供した文化能力研修全5回と、Webinar開催要領に関する2回の研修についてまとめたもの。 IPIKAプログラムの紹介、異文化環境における対立への対応、病院における差別・格差、異文化間コミュニケーション、多文化環境における医療倫理からなり、すべての研修に主催者として参加した。 A4版 頁数:全134頁 著者: 野地有子、溝部昌子他12名
<p>外国につながるのある人たちへの看護コミュニケーションに関する研究「看護英語ノート」の制作</p>	共著	2021年3月	西南女学院大学保健福祉学部附属保健福祉学研究所 2019 報告書	外国人患者とのコミュニケーションには言語だけでなく、文化的背景の考慮とその対応が必要であり、そのための教材開発について示した 4版 頁数:全15頁 著者: 溝部昌子、野地有子、藤田比左子、Mathew Lee Porter、近藤麻理、小寺さやか、飯島佐知子 担当:p10-11

2020年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<p>【学会発表】 外国につながるのある人たちへの看護ケアー異文化との出会い 42 病院マップの開発と活用 第2報一</p>	共著	2020年8月	第10回日本看護評価学会 (Webinar)	<p>「異文化との出会い 42 病院マップ」を用いた医療機関の看護職とそれ以外の医療専門職、市町村保健師を対象の研修会において実施したアンケートで、組織の支援として希望することについての自由記載は、通訳の確保、多言語の表示、ツールの活用、システム構築、研修・事例検討の6つに分類された。相原綾子,野地有子,近藤麻理,小寺さやか,飯島佐知子,溝部昌子 第10回日本看護評価学会学術集会講演抄録集 p48</p>
<p>HCAHPS を用いた日本に滞在する外国人と日本人の日本の病院での入院経験の質の比較</p>	共著	2020年8月	第10回日本看護評価学会 (Webinar)	<p>日本の病院に入院した外国人と日本人を対象に入院経験についての質問紙調査の結果、看護師のコミュニケーションについて、外国人受け入れ認証病院で非認証病院より、外国人が日本人より、自立度が高いほど高いという結果であった。飯島佐知子,松岡光,野地有子,近藤麻理,小寺さやか,溝部昌子,相原綾子 第10回日本看護評価学会学術集会講演抄録集 p49</p>
<p>ICT を活用した COVID-19 への対応例：看護職の多文化対応能力を高める国際セミナー実施評価 第1報 タイムラインに沿って.</p>	共著	2020年8月	第24回日本看護管理学会学術集会 (於 金沢 Webinar)	<p>2020年3月14日東京で実施予定であった研修会を Web 開催した。これに至る準備の過程と、参加者の評価について示したもので、事前配信した実施要領の有効性は、役に立ったとの回答が100%で、約97%が今後も Webinar に参加したいと回答した。 野地有子,藤田 比左子,飯島佐知子,近藤麻理,小寺さやか,溝部昌子,小林康司,浜崎美子,大友英子,野崎章子 第24回日本看護管理学会学術集会抄録集, p235</p>

2020年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ICT を活用した COVID-19 への対応例：看護職の多文化対応能力を高める国際セミナー実施評価 第2報 参加者への導入と共創.	共著	2020年8月	第24回日本看護管理学会学術集会（於 金沢 Webinar）	2020年3月14日東京で実施予定であった研修会を Web 開催した。Webnar 参加のためのレディネス育成として、メディア・ユニバーサル・デザインの5原則に基づき、操作ガイドを作成し、事前に受講者に配布した事を示した。 藤田 比左子,野地有子,飯島佐知子,近藤麻理,小寺さやか,溝部昌子,小林康司,浜崎美子,大友英子,野崎章子 第24回日本看護管理学会学術集会抄録集, p248
Geriatric nursing practicum on campus and at home during the COVID-19 pandemic.	共著	2020年9月	the13th International Nursing Research Conference（於 Seoul Webinar）	コロナ禍における老年看護学実習 I の実施について、学内での技術実習、遠隔でのディスカッションや看護過程の展開を組み合わせにより、従来の学修目標を再構成して実施できた事を示した。 <u>Akiko Mizobe, Yasuko Maruyama, Yuri Kaneko, Etsuko Yoshihara</u>
Mode of Remote Elderly Facility Practice in COVID-19 Pandemic.	共著	2020年9月	the13th International Nursing Research Conference（於 Seoul Webinar）	コロナ禍における老年看護学実習 II の実施について、高齢者施設とのリモートで、学生が高齢者とコミュニケーションをとったり、高齢者の生活場所を見学するなどの方法を取り入れたことを示した。 <u>Etsuko Yoshihara, Yasuko Maruyama, Yuri Kaneko, Akiko Mizobe</u>
日本循環器看護学会学術委員会 循環器看護の定義及びステイトメント作成に関わるワーキンググループ：循環器看護とは何か考える-循環器看護の敵の作成プロセス報告-	共著	2020年10月	第17回日本循環器看護学会学術集会（於 京都 Webinar）	循環器看護の定義に関して、クリティカルケア、シナジーモデル、慢性看護、糖尿病教育看護、脳血管神経領域、血管看護の点から整理し、Cardiovascular Health として仮定義したプロセスを示した。 <u>岡田彩子,三浦英恵,溝部昌子,北村愛子,瀬戸奈津子,南川貴子,</u>

2020年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護師の文化能力研修に用いる教材の検討-看護英語ノートの制作-	共著	2020年11月	グローバルヘルス合同大会 2020 (ポスター、於大阪 Webinar)	仲村直子,濱上亜希子 外国人患者とのコミュニケーションに関する検討として、「異文化との出会い 42 病院マップ」の 15 の場面に適用できる「看護英語ノート」を制作したプロセスについて示した。 溝部昌子,野地有子,近藤麻理,小寺さやか,飯島佐知子,炭谷大輔
Web-based Seminar as an Effective Way of Learning Including Interactive Experiences in COVID-19 Pandemic (Part1)	共著	2020年12月	10th Hong Kong International Nursing Forum cum 3rd Sigma Asia region Conference (於香港 Poster Webinar)	2020年9月19日、9月26日、日本-ドイツで行われた看護師の異文化対応における Webinar におけるアンケートで、年代により反応が違い、40歳代は最も多くテキストで反応があった。 Hisako Fujita, Ariko Noji, Daisuke Sumitani, Sachiko Iijima, Mari Kondo, Sayaka Kotera, Akiko Mizobe, Koji Kobayashi, Yoshiko Hamasaki, Eiko Ootomo, Akiko Nosaki
Web-based Seminar as an Effective Way of Learning Including Interactive Experiences in COVID-19 Pandemic (Part2)	共著	2020年12月	10th Hong Kong International Nursing Forum cum 3rd Sigma Asia region Conference (於香港 Poster Webinar)	2020年9月19日、9月26日、日本-ドイツで行われた看護師の異文化対応における Webinar への接続状況で、延べ170名参加者の内、40歳代、50歳代、30歳代が多く、90分、56分、150分のセッションで、時間が長くなるほど、年代が長ずるにしたがって、接続率が70%代前半まで低下することが分かった。 Daisuke Sumitani, Hisako Fujita, Ariko Noji, Sachiko Iijima, Mari Kondo, Sayaka Kotera, Akiko Mizobe, Koji Kobayashi, Yoshiko Hamasaki, Eiko Ootomo, Akiko Nosaki

2020年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
医療通訳士と看護師の協働-看護師・病院として準備しておくべきこと-	共著	2020年12月	第40回日本看護科学学会学術集会（於東京 Webinar）	2019年11月nGlobe研修におけるパネルディスカッション「医療通訳士と看護師の協働」をまとめたもので、現状から改善できることとして、看護師は通訳者でなく患者に話す、委託内容と成果を共有する、委託の手続きやプロセスを共有し多職種連携のメンバーとして認識するがあげられた。 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子, 溝部昌子, 野崎章子, 浜崎美子, 小林康司, 松岡光
外国につながるのある人たちへの看護ケアー看護学生における「異文化との出会い 42 病院マップ」の活用ー	共著	2021年2月	第25回聖路加看護学会学術大会 (Webinar)	「異文化との出会い 42 病院マップ」を利用した看護学部学生を対象としたアンケートで、看護の状況を想起することができた、異文化の人の習慣や文化などについてもっと知りたいと思った、看護や医療は異文化への対応を整える必要があると思ったと 95%以上が回答した。 野地有子, 梅田麻希, 溝部昌子, 藤田比左子, 近藤麻理, 小寺さやか, 浜崎美子, 大友英子, 飯島佐知子

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(1) 共同研究

研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)
------	------	--------------------	-----------------

「世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン (17H01607)	文部科学省科学研究費補助金 基盤 (A) (H29-33)	代表：野地有子 (千葉大学) 研究分担者	分担研究者 100,000 円 (R2)
看護師による POCUS 活用に関する研究-DVT 予防対策と安全なケアへの効果-(20H03990)	文部科学省科学研究費補助金 基盤 (B)	代表：○溝部昌子 (FY2020-2024)	1,170, 000 円 (R2)

外部資金 (科学研究費補助金等) 導入状況 (本学共同研究費を含む)			
(2) 個人研究			
研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
なし			

社会における活動等		
団体・委員会等の名称 (内容)	役職名等	任期 期間等
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	共同研究員	2015 年～1 年毎に継続更新中 研究会議出席 10 回
日本血管看護研究会	代表世話人 学術集会主催 学術集会プログラム委員	2015 年～ 2015 年～毎年 2015 年～毎年
西南女学院大学 認定看護管理者教育課程	教育運営委員 検討委員	2018 年度より ファーストレベル開講式、閉講式出席 運営会議出席 2 回
日本学術振興会	科学研究費委員会専門委員	2020 年 12 月 1 日 ～2021 年 11 月 30 日

学内における活動等 (役職、委員、学生支援など)
国際交流委員会委員 紀要委員会委員 看護学科 1 年生アドバイザー 新カリキュラムワーキンググループ